

マラヤの華文文学 ——移民のアイデンティティの変容——

田 中 恭 子

1. はじめに

マラヤ華文文学とは、旧英領マラヤ（現在の西マレーシアとシンガポール）において、華文（中国語）で書かれ、中国文学にない特徴をもった文学のことで、時期的にはシンガポールの分離独立（1965年）、以前のものを指す。しばしば馬^ま華^か文学と略称されるが、馬^まは馬來^{マラヤ}亜の略である。戦前、西マレーシアとシンガポールは、経済的・社会的にはほぼ一体であり、両者の華人社会も区別されることなく、マラヤ華人社会として活動していた。1948年、マラヤ連邦が成立し、シンガポールはこれから除外されたが、経済的・社会的には密接な関係を保ち、63年、両者は再び合体してマレーシア連邦を形成した。したがって、65年まではマラヤ華人社会が継続し、華文文学もシンガポールのみが分離することはなかったのである。

馬華文学の活動の中心は、華人人口の最も集中しているシンガポールとペナン（表1参照）である。マラヤ以外の東南アジアに居住する華人の作品もここで発表されることが多く、これらも馬華文学に含まれる。したがって、馬華文学は事実上東南アジアの華文文学全体を指すものと言っても間違いではない。馬華文学の活動期間である1920年代から65年にかけて、シンガポールは急速に発展してマラヤの政治・経済・文化の中心都市としての機能を強めた。これに対してペナンは相対的に地盤沈下したので、文学活動もシンガポールへの集中傾向を強めている（表1、表3参照）。

表1. 戦後馬華文学出版状況（1945－65年）

出 版 地	点 数	%
シンガポール	537	66
マ ラ ヤ	129	16
香 港	143	18
合 計	809	100

出典：楊松年『新馬華文文学論集』25ページ。

マラヤ華文文学は移民の文学である。その担い手は中国からの移民とその子孫たちであり、当初は中国文学の一部であることを疑う者はいなかった。しかし、時がたつに従って、中国文学に対して独自性を主張するようになり、しだいに別個のアイデンティティを確立していく。その過程は、移民自身のアイデンティティが中国から離れ、マラヤへ移っていく過程でもある。

本稿は個々の作家や作品の検討を目的とするものではない。主たる目的は、まず第1に、馬華文学の歴史をあとづけ、これを政治・経済・社会の流れのなかに位置づけ、中国文学からの分離過程を検討することである。第2に、これを通して、マラヤにおける中国移民のアイデンティティの変化を検討し、分析する。これは、移民の現地化の問題に留まらず、複合国家におけるエスニシティや国民統合の問題としての側面をもっているし、また言語統合の問題とも密接に関連している。第3の課題は、馬華文学の特徴を明らかにし、これとの関連において、1965年以後の展開を一瞥し、将来の展望を試みることである。⁽¹⁾

2. 社会的背景

中国（台湾・香港を含む）国外に永住あるいはそれに近い状態で長期に

わたって居住する中国系の人々は2,500万人以上にのぼるといわれる。彼らは一般に華僑・華人と総称されるが、華僑は中国国籍のまま長期的に海外に居住する者を指し、華人は中国国籍を離れて現地国籍になっている者を指す。これら華僑・華人の約8割は東南アジアに集中している。⁽²⁾ とくにシンガポール・マレーシアにおいて集中度が高く、前者では人口の約4分の3、後者では約35%を占め、その大部分が都市に集中している。

彼らの大半は、19世紀後半以降に中国南部の福建・広東両省から移住した者およびその子孫で、現地に定着してまだ2、3世代しかたっていない。

表2. マラヤ華人人口の推移

年	華人人口 (千人)
1911	916.6
1921	1,174.8
1931	1,709.4
1941	2,379.2
1957	3,424.4*

出典：Victor Purcell, *The Chinese in Malaya* (Kuala Lumpur: Oxford University Press, 1967), Appendix III.

*堀井健三・萩原宣之編『現代マレーシアの社会・経済変容』アジア経済研究所、1988年、240ページおよび綾部恒雄・永積昭編『もっと知りたいシンガポール』弘文堂、1983年、41ページより算出。

表3. シンガポール・ペナン華人人口の推移 (人)

年	シンガポール	ペナン
1911	219,577	111,738
1921	317,151	135,288
1931	418,640	118,812
1941	599,652	230,679

出典：楊松年『新馬華文文学論集』シンガポール、南洋商報、1983年、1ページ。

移住1世の大部分は、ほとんど教育を受けていない貧しい農民出身で、錫鉱山などの労働者の職を求めて海を渡った。皆ひと財産作ったら帰国するつもりであり、移住当初から永住の意図をもっていた者は例外的であった。⁽³⁾ 事実、帰国した者も少なくなかったが、結局永住した者、新たに渡来した者の方が多く、表2に見るように、マラヤの華僑・華人人口は着実に増えていった。

彼らは華人（華僑）社会を形成し、独自の言語・文化・生活様式を保持するとともに、経済・社会活動を展開した。⁽⁴⁾ 華文による文学活動はその一環である。文学活動はある程度まとまった数の作家と読者が存在しなければ成立せず、識字率の上昇すなわち教育の普及が前提条件になる。華人の識字率は、移民1世が一定の経済力を蓄え、2世の教育のために学校を作り、その成果が現れて初めて上昇するのである。華語（中国語）で教育を行う学校（華語学校）が急速に増えるのは、1920～30年代のことであり、⁽⁵⁾ 馬華文学の成立・発展は、これと時期を同じくしている。

3. 馬華文学の独自性

先に述べたように、馬華文学は中国文学から派生し、のちに中国文学とは別個の独自の文学と見なされるようになった。ある地方で書かれる文学が、そのテーマやスタイルにおいて他の地方と違った特色をもつのは当然であり、中国文学にも各地方の特色がある。馬華文学の独自性は、こうした地方色を超えたものののだろうか。テーマやスタイルにマラヤの特色があるとしても、同じ華文で書かれる以上、中国文学との違いは、中国各地の地方文学相互間の違いとそう異ならないのではないだろうか。馬華文学の作家は、マラヤに生活するとはいえ、華語で教育を受け、日常的にも中国の南部方言を話し、華人社会に生活基盤をもつ者である。そのテーマは華人社会が中心であり、場所はマラヤであっても、事実上中国から離れていないのではないかという疑問が起こる。

馬華文学が中国の地方文学と決定的に違うのは、後述するように、その作家たち自身が中国文学の一部であることを拒否した点にある。そして、その背景には、マラヤが中国のどの地方とも異なっており、華人社会といえども中国と同じではないという事実がある。マラヤは、気候・風土・社会・文化のいずれにおいても、また、経済や政治・行政のあり方も、中国とはまったく異なっている。華僑・華人は、そうした環境の影響を受け、これに適応していくなかで、中国にいる中国人とはかなり違った心性・価値観・生活様式をもつようになっている。また逆に、中国にいれば当然起こったはずの変化が起こらず、中国ではすでに失われてしまった古い慣習や生活様式を保持し続けている側面もある。

マラヤには華僑・華人が集中して住み、このため彼らの現地化が進みにくいのは事実である。これは他の東南アジア諸国——たとえばタイ・ビルマ・フィリピン・インドネシアなど——の場合と比較すれば、一見明白である。しかし、華人が多数を占めるシンガポールにおいてさえ、彼らが非華人社会と無縁に暮らすことは、まず不可能である。また、たとえ可能であるとしても、移民の集まりである華人社会は、中国国内の中国人社会とは大きく異なっている。さらに、この相違が無視できるほど小さいと仮定しても、長い年月の間に中国国内とは違った変化をとげることは避けられない。

したがって、馬華文学のテーマが華人社会に限られるとしても、華人社会の問題は、当然中国社会の問題とは異なっているのだから、取り上げるテーマも違ってくる。たとえば、1920～30年代の中国文学が好んで取り上げたテーマ、世代対立あるいは伝統と近代の相剋は、馬華文学ではほとんど取り上げられない。これは次のような理由によると考えられる。まず第1に、移民社会には伝統的エリート層が存在せず、偉大な中国文明の体現者・守護者を自任する者がいない。中国文学に伝統の代表者として現れる父は、ほぼ例外なく中国社会のエリートであるが、移民社会にはそうした父はい

ないのである。

第2に、移民はそれぞれの出身地方の大衆文化の伝統を背負って渡来したが、こうした伝統は元来の社会・経済基盤から切り離され、異なった文化と接触して、変容せざるをえない。移民の特性は、故国の伝統の固守よりも柔軟な適応力にあり、生活上の必要に従って伝統の変容を受け入れていくのが普通である。このため、マラヤ華人社会は伝統に関しては身軽であり、中国の若い世代が感じたような伝統の重みに圧倒される息苦しさも、必死の反抗を試みる必要も余り感じられないのである。

第3に、移民社会では伝統を攻撃する足場を固めるのが難しい。植民地マラヤで近代を代表するのはイギリス人および英語で教育を受けた現地人（華人を含む）エリートであり、彼らは華人社会の外にいる。⁽⁶⁾ 馬華文学の作家や読者は、言語・文化を異にするイギリス系の近代に対して帰属感をもたないので、これを足場に中国的な伝統を攻撃することはできない。華人社会内部の伝統と近代の差は、華人社会と英語系エリート社会の差に比べれば、言うべきほどのものではなく、前者の内部には伝統攻撃の強固な足場はない。支配階級である後者の圧倒的な力に対して、華人独自のアイデンティティを守る立場にある馬華文学が、中国的伝統を攻撃することは難しいのである。

第4に、華文作家は華人社会の文化人であり、華語文化に強い誇りをもっているし、複合社会において華語文化の旗手としての役割を果たさねばならない。中国的伝統の欠点をあげつらえば、他の種族文化に比べて華語文化が劣っているかのような印象を与える可能性があり、華人のアイデンティティのためにも、自分の誇りのためにも、好ましくない結果になる恐れがある。第5に、こうした事情から、世代対立や伝統と近代の相剋というテーマは、マラヤにおいては、華人社会に属する親と英語で教育を受けた子との対立・相剋の形で取り上げられる。したがって、それは華文ではなく英文で書かれた作品に現れる。事実、このテーマは、戦後発展した英

語文学ではしばしば取り上げられている。⁽⁷⁾

次に、スタイルの面での独自性について検討しよう。いうまでもなく、基本的には、中国文学と馬華文学は、同じ言語すなわち北京地方の方言を基礎とした中国共通語で書かれている。しかし、後者に共通し、前者には見られない特徴的なスタイルがある。まず第1に、中国文学の主流が華中・華北出身者であるのに対して、馬華文学の作家・読者の大半は、福建・広東両省の方言を母語とする。これら南方方言は、語彙・発音・文法構造ともに北京方言とはかなり違うので、馬華文学には南方方言独特の語彙や言い回しが混じる。少数だが方言で書かれた作品もある。

第2に、馬華文学は、多言語社会の文学である。作家も読者も日常的に英語・マレー語・タミル語等と接触しているため、必然的にこれらの言語から影響を受ける。馬華文学は、これらの言語から語句や言い回しを取り入れたり、文法的な影響を受けたりして、独特のスタイルを発達させている。第3に、中国とは異なった環境にあって、中国語では表現できない事物・現象を表現するために、独自の語句や言い回しが必要になる。⁽⁸⁾

このように見ると、馬華文学の独自性は根拠のあるもののように見える。しかし、その独自性を支える最大の柱は、作家と読者の帰属感が中国を離れてマラヤに移ったことであろう。彼らが自分自身を、中国でなくマラヤに属する者として明確に認識するようになったことが、馬華文学を中国文学とは別個の独自の文学にしたのである。後述するように、これは長い年月と度重なる激しい葛藤と論争を経て、戦後になってようやく解決をみた問題である。

4. 新文学の誕生 1919～25

1919年を馬華文学創始の年とするのが通説である。この年に、マラヤの事物を題材とする新文学(口語で書かれた文学)に発表の場を提供することを趣旨として、シンガポールの有力紙『新国民日報』と『ラッポ^{ラットボー}報』がそれ

ぞれ「新国民雑誌」,「叻報附張」と題する1ページの文芸副刊を創刊したからである。これによって、東南アジアの華人は初めて自分たちの生活を描いた文学作品をもつことになった。皮肉なことに、新文学は中国からもたらされた。当時最高潮に達していた中国の新文化運動（五四運動）は、社会・文化の近代化の一環として文学革命、すなわち口語による自然主義文学を提唱していた。この運動が東南アジアの華人社会に波及した結果、身辺の現実をありのままに描くという主張にそって馬華文学が誕生したのである。⁽⁹⁾

したがって、馬華文学は現地華人の内発的な要求から出たというよりも、むしろ中国の動きから取り残されまいとする「僑民」意識（一時的に外国に住んでいる中国人としての自己認識）の表れと見る方が真実に近いであろう。事実、初期馬華文学の作家たちは、中国で生まれ育った、マラヤには新来の若い知識人で、中国で新文化運動の洗礼を受け、そのマラヤへの適用を試みたのである。

しかし、彼らがマラヤにきたこと自体、マラヤ華人社会が文化を育てる土壌を用意しつつあったことを示している。第1次世界大戦はマラヤに未曾有の繁栄をもたらし、ますます多くの移民を引き付けた。1920年にはマラヤの華人人口は、100万人に達し、シンガポールだけでも30万人を数えた（表2, 3参照）。ブームに乗って財をなした者も多く、教育・出版事業も発展した。教師や編集者として中国から中等・高等教育を受けた人々が招かれ、馬華文学の創始者となったのである。

草創期である1920年代前半には、馬華文学はたんにマラヤを題材に使ったにすぎず、作家・読者とも中国への強い帰属感をもっていた。作家たちは中国新文学の中心地、上海の文壇で認められることを目標に、異国情緒を求める中国人の目でマラヤ社会を描いた。この時期には、まだ新文学の作品自体が少なく、文芸副刊の紙面の大半は文語で書かれた旧文学に占められていた。しかも、中国を題材とする作品が主流で、現地に題材を取っ

た作品は傍流であり、質的にも見るべきものはまれであった。⁽¹⁰⁾

5. 現地化の始まり 1925～35年

1925年、『新国民日報』と『叻報』は、新文学運動の推進をうたって、それぞれ「南風」、「星光」と題する文芸副刊を創刊した。この時から馬華文学は本格的な展開を見せ始める。新文学の作品が飛躍的に増え、文学の主流となっただけでなく、マラヤ植民地社会の暗黒面をえぐり、その改革を主張するようになった。⁽¹¹⁾ これとても、上海文壇が反帝国主義・反封建主義へ傾斜したので、それに追随した結果である。しかし、少なくともマラヤ社会の矛盾に目を向け、その解決の道を探り始めた点で、馬華文学は初めて現地アイデンティティの兆しを見せたのである。

1920年代後半には、上の2紙の副刊に続いて他の日刊紙も次々に文芸副刊を出し、同人誌も雨後の竹の子のごとく創刊され、その数は両者合わせて30を超えた。これらはすべて新文学推進のために刊行されたもので、口語による近代文学をマラヤ華人社会に定着させる役割を果たした。⁽¹²⁾ 第1に、文学活動の場が飛躍的に拡大したことによって、作品の質・量が大きく成長した。また、第2に、これにともなって東南アジア華人独自の文化・文芸の育成や僑民意識からの脱却を主張する評論も現れた。第3に、作品のテーマも多様化し、華人社会における女性の抑圧を専門テーマとした張金燕、L S 女士が読者の支持を得ている。⁽¹³⁾

1920年代初期には、マラヤの主要な産物であるゴムと錫の輸出が低迷し、マラヤ経済は不調であった。それにもかかわらず、中国南部の内戦と経済不況のために、華人移民の流入は続いた。この10年間にマラヤの華人口は70万増えて、1930年には170万に達した(表2参照)。この結果、華人失業者が急増し、就業している者も多くは飢餓賃金に甘んじなければならなかった。20年代後半には、経済は回復したが、人口増加のために失業・低賃金の問題は解決しなかった。

1920年代の中国は、共産党の指導下に民族主義的な労働運動が高揚した時期で、外資系企業の労働者の反帝国主義を旗印にしたストが頻発していた。1925年夏から13ヵ月に及んだ香港の反英ゼネストは、その代表的なものであるが、これを広州の国民党・共産党合同の革命政府が支援したので、中国南部には革命的気運が高まった。失業と低賃金に苦しむマラヤの華人労働者は、中国の戦闘的な労働運動の影響を受けやすい状況にあった。とくに、彼らと同じ中国南部出身の労働者たちが、マラヤの支配者でもあるイギリス帝国主義に対して勇敢に戦った香港ゼネストは、彼らに強い感銘を与えた。中国から派遣されたオルグによって、中国共産党の支部として、マラヤ共産党が組織されたのは、このころのことである。一方、イギリス植民地当局は香港での苦い経験からマラヤ華人の動きに神経をとがらせていた。

1929年に始まった世界恐慌の波をかぶって、マラヤ経済はいっきょに悪化し、華人大衆の貧窮は深刻化した。現地社会への関心を深め、中国共産党の影響を受けた馬華文学は、マラヤ華人底辺層の惨状に強い同情を示し、反植民地革命を主張する「革命文学」を生んだ。1930年、『星州日報』の文芸副刊に掲載された寰遊の詩劇「十字路」⁽¹⁴⁾はその典型であったが、これは当局の許容範囲を超え、副刊は停刊、編集者は国外に追放された。続いて『叻報』の副刊にも同じような弾圧の手が伸びて、華文出版事業は混乱に陥った。弾圧を恐れた日刊紙は、世界恐慌による財政難もあって、文芸副刊を停刊し、同人誌も次々に姿を消した。発表の場を失った馬華文学は、しばらく停滞することになる。⁽¹⁵⁾

1932～33年から再び有力紙が副刊を出し始め、34～35年には新しい同人誌も出てくるが、いずれも数が少なく、弾圧の恐れからテーマも限られ、創作活動の活性化にはつながらなかった。停滞した創作に代わって、34年から35年にかけて活発な「地方作家」論争が起こった。ここで初めてマラヤの華文文学は中国文学の一地方文学であるべきか否かが真剣に議論され

た。このマラヤで最初の文学論争は、論点がかみ合わず、泥仕合の様相を呈した面があり、明確な結論は出なかった。しかし、従来中国文学の一部であることを暗黙の了解としてきた馬華文学の作家たちが、ようやくこれに疑問をもち、アイデンティティの問題を考え始めたのである。論争のなかから「マラヤ文学」の名称が生まれ、中国文学と別個のアイデンティティを主張する、事実上の馬華文学独立宣言も現れた。この論争を通じて馬華文学は独自性を打ち立てる方向へと一歩を進め、作家たちの地位を向上させたと言えるであろう。⁽¹⁶⁾

6. 抗戦文学 1935～42年

1935～36年から、論争のみのりが創作活動の回復となって表れ始める。経済がようやく不況から脱出し、華人の生活もやや向上し、また、中国の革命情勢も収まって、当局も警戒を緩めた。この時期、日本は東北から華北へ支配の手を伸ばし、華人社会に反日の気運が高まった。反日は日本に中国権益を脅かされたイギリスの利害と一致するもので、植民地当局は華人社会の活動に神経をとがらせる必要がなくなったのである。各華字紙は文芸副刊を復活・拡大し、作品は質・量ともに上昇機運に乗ってきた。⁽¹⁷⁾

これをいっきょに爆発的な活況へと押し上げたのは、37年7月の日中戦争の勃発である。戦火を逃れて中国から渡来した高名な作家・文学者たち——王任叔・郁達夫・胡愈之等——が主要な日刊紙の副刊編集者のポストに迎えられて指導的地位についた。鉄抗・葉尼・劉思・金丁等、中国渡来の若手作家が育ち、中国留学帰りの土着作家、椰青・李蕓郎・疾流等が名をあげ、マラヤ在来の流冰・嘯平・乳嬰・張天白等が大きく成長した。37年7月から42年2月のシンガポール陥落までの4年半の期間に活躍した作家は、一流と目される者だけでも60人を超え、質的にも量的にも馬華文学の最盛期を形成した。⁽¹⁸⁾

抗戦文学期と呼ばれるこの時期の馬華文学は、アイデンティティの面で

は、複雑な様相を見せた。日中戦争を祖国(中国)存亡の危機としてとらえたマラヤ華人社会は、抗日救国運動に熱狂し、階層をとわず、経済的負担をいわず、時間や労力の犠牲をかえりみず、祖国支援に動いた。各地に募金会が組織され、中国の国債を売り、さまざまな形で戦費の募金を行い、また、日本商品のボイコット・日本船の荷役拒否・日本企業で働く者には辞職を呼びかけ、圧倒的な支持・協力を得た。マラヤでの安穏な生活を捨て、中国に赴いて抗戦に投じた若者も少なくなかった。⁽¹⁹⁾ 馬華文学は華人大衆の中国に対する熱い愛国心に支えられ、これを共有し鼓舞することによって、隆盛をきわめたのである。その意味では中国への帰属意識は強烈である。しかし、これは盾の一面にすぎない。

その反面では、馬華文学は初めて大衆的基盤を獲得したことによって現地アイデンティティを強めていった。作家たちは、自ら実際の救国活動に加わって、大衆とともに行動したばかりでなく、大衆にアピールする必要から、俗語・方言を使ってマラヤ華人を描く「通俗」文学運動を展開した。抗戦宣伝と募金のための新劇公演が盛んに催され、その需要に応じて大衆にわかる数多く的一幕劇が書かれた。その主題は抗日戦であるが、中国における戦いとともに、マラヤ華人自身の英雄的な抗日行動が好んで取り上げられた。⁽²⁰⁾ 馬華文学の作家たちは、誇りをもってマラヤ華人を描くことによって、中国の作家・文学者に対する劣等感を克服していったのである。

彼らは、戦火を避けてマラヤに身の安全と生計の道を求めた中国知識人たちが、批判の目で眺めた。新来者に就職口を横取りされた怒りが、彼らの批判を先鋭化した。華字新聞社や華語学校が中国渡来の知識人を無条件に崇拝し、きそって彼らを重要ポストに迎え厚遇したので、土着の知識人たちは、本来自分たちのものであるはずのポストを横取りされた形になっていたからである。1938年に現れた、中国の「逃難」文化人を問詰する一連の論文は、馬華文学者たちの複雑な思いを反映している。⁽²¹⁾

これは馬華文学の主体が、しだいにマラヤ在住の長い作家に移っていた

ことと無関係ではない。抗戦文学期のすぐれた作家約60人のうち、日中戦争が始まってからマラヤに来た者は1割程度にすぎず、残り9割の半数近くがマラヤ生まれあるいはマラヤ育ちである。中国育ちの者も、大部分は30年代前半以前に渡来している。ただし、これは土着あるいはそれに近い作家の比率が以前より高まったということであって、馬華文学の主導権が完全に土着作家の手に移ったということではない。抗戦文学運動で指導的役割を果たした作家の大半は、1935～38年に渡来した者であり、マラヤ生まれの作家も中国で高等教育を受けて、この時期にマラヤに帰った者が多い。⁽²²⁾

たとえば、抗戦文学の最高傑作とされる中編小説「試練の時代」⁽²³⁾の作者、鉄抗は1936年にシンガポールに渡っている。37年から文筆活動を始め、42年の死に至るまでマラヤ各地で文芸紙誌の編集のかたわら、多数のすぐれた小説・戯曲・文芸評論を発表し、馬華文学最大の指導者のひとりとなった。彼の「馬華文芸論」は総合的な馬華文学論の古典となり、現在でもこれを超えるものは出ていないと言われている。⁽²⁴⁾

1942年2月、シンガポールが陥落し、マラヤ全土が日本軍の占領下に入り、馬華文学は45年8月の終戦まで中断する。日本占領下で華人の抗戦運動はジャングルを基地としたゲリラ戦の形で続けられた。マラヤの地に血を流すことによって、華人の現地アイデンティティは強化され、マラヤを見捨てて撤退したイギリスに対して不信感を深めていくのである。

7. 「独自性」論争 1947～48年

戦後、新たな幕をあけた馬華文学の主力は、ゲリラ戦に加わっていた作家たちであった。45～48年の時期、世界的に高まった植民地解体・民族独立の気運を背景に、彼らが好んで取り上げたテーマは、反植民主義とマラヤ華人の過去と未来である。植民地支配と戦争の暗い過去と希望に満ちた明るい未来を対照させ、マラヤの未来を担う強い意欲を示した楽観的な

作品が多い。⁽²⁵⁾

もはや彼らには、自分がどこに帰属するかの迷いはない。この時期に馬華文学史上最大の論争、「馬華文芸の独自性」論争が起こり、アイデンティティの問題に決着をつけたのは、自然のなりゆきであった。30年代前半の論争以来10年間の経験が、馬華文学の作家たちを成長させ、アイデンティティ問題を再考させたのである。1947年1月から約1年3カ月にわたって続いたこの論争は、名のある馬華文学作家のほとんどを巻き込んだだけでなく、郭沫若・夏衍等中国の有名作家も参加した。また、取り上げられた問題也多岐にわたり、突っ込んだ議論がたたかわされた。⁽²⁶⁾

論争の主な特徴を要約すれば、次のようになる。⁽²⁷⁾ 第1に、マラヤ華人の現地アイデンティティが確認された。この論争において初めて、マラヤ華人がマラヤに永住することが当然の前提とされ、馬華文学は華人のみならず、複合社会であるマラヤ全体の問題に取り組み、その将来に関与していく姿勢を見せた。もはや僑民意識は問題にされず、逆にマラヤ華人文化はマレー文化・インド文化の影響を受けて、すでに中国文化とは異なる独自のものとなっていることが強調された。したがって、馬華文学は内容・形式ともに中国文学の支流ではありえないのである。

第2に、こうした現地アイデンティティの強固な基盤に立って、馬華文学者たちは「僑民作家」、「逃難作家」に集中砲火を浴びせた。日中戦争初期に渡来した作家たちのほかに、戦後中国の内戦を避けてマラヤに來た中国知識人があり、彼らに対する在來の作家たちの苦々しい思いは、抗戰文学期の比ではなかった。ひとつには、マラヤ經濟がまだ戦争の痛手から立ち直っておらず、失業・貧困に苦しむ者が多い時に、外からやって來て在來の者の職を奪うことに対する反感があった。しかし、もっと重要なのは、日本占領期にマラヤ華人が苦難に耐え、血であがなったマラヤの地を、中国の知識人が自国での困難からの避難場所と心得ているらしいこと、しかも中国との違いを無視して中国文学を押しつけることへのやりきれなさで

あった。マラヤ社会の現実に立脚した文学活動を行うべきだという論調が大勢を占めたのである。

第3に、このような馬華文学の独自性の主張に反対して、中国とのつながりを重視する論者は、中国の作家・文学者が中心であった⁽²⁸⁾が、その数は少なく、論拠も弱く、終始劣勢に立たされた。彼らの主な主張は次の2点に集約できる。(1)馬華文学は中国文学の支流として生まれ、常に中国渡来の作家たちによって支えられてきた。したがって、「僑民文学」を排除しては馬華文学はありえない。(2)文学の価値は普遍性にあり、偏狭な独自性や現地アイデンティティの主張は、文学の質を低下させる。

これら2つの主張は、いずれも説得力があったとは言えない。(1)は過去については当たっているが、馬華文学の発展過程を動的にとらえる視点に欠け、将来もそうであるという論拠が弱い。(2)は一般論としては正しいとしても、具体的に馬華文学が中国文学に対する独自性を主張すれば、普遍性を失うのかという問題には答えていない。一般論としても正しいかどうか疑問がある。独自のアイデンティティをもつ世界各国の文学が、それぞれの独自性と普遍性を兼ね備えた名作を生んでいるからである。

しかし、これらの主張が説得力をもちえなかった最大の理由は、これを主張した中国の知識人たちが、マラヤ華人の新たなアイデンティティを求める苦闘に対して、理解と同情を欠いていたことであった。馬華文学が質・量ともに中国文学に劣ることは否めない。中国文学者の側には、馬華文学はまず質を高める必要があり、それには中国文学の支流として本流から支援を受けるのが近道であり、これを拒否するような独自性の主張はばかげている、という考えがあったようである。しかし、本流に属する彼らの胸の奥に、支流をいつまでも支流としてつなぎ留めておきたいという、利己的な欲求がなかったとは言いきれない。遠く離れたマラヤの地に、自分たちを本流の権威と仰ぎ、教えを請う支流の文学者たちがいるのは、悪い気分ではあるまいから。馬華文学者たちは、こうした中国文学者の傲慢さを

鋭敏に嗅ぎ取り、それに対する怒りをばねに独自性を主張したとも考えられる。

活発な論争と独自性の強い主張は、当時マラヤ華人が抱いていた、マラヤ独立と自分たちの将来への明るい展望・自信を反映している。華人は日本占領下で抗日の戦いを続けたマラヤでの唯一のグループであり、このために彼らは日本軍から目のかたきにされて、多大な犠牲を払った。ゲリラ戦を指導したマラヤ共産党を中心とする新しい世代の華人たちは、来たるべき独立マラヤで、当然重要な役割を与えられるものと期待していたのである。⁽²⁹⁾

しかし、戦後政治は彼らの予想しなかった方向へ展開した。イギリスはマラヤ共産化の危険を恐れて、保守的なマレー人支配層を独立交渉の相手に選んだ。それでもイギリスは現にマラヤに居住し、永住を望む者には種族をとわず平等の市民権を与えるよう提案したが、マレー人はこれに同意しなかった。⁽³⁰⁾ 失望した華人青年たちは、1948年春、共産党の呼びかけに応じて再び武器を取り、ジャングルへ戻った。今度の敵はイギリス植民地主義である。武装闘争の開始によって文学論争は終息に向かい、6月には非常事態が宣言されて、マラヤの政治環境は一変してしまう。厳しい言論統制の下に政治問題や反植民地主義は出版物から追放され、⁽³¹⁾ 馬華文学は最大のテーマを奪われて低迷期に入った。

8. 「反黄」運動 1953～55年

非常事態は1960年まで続いたが、馬華文学は53年に低迷から抜け出す。馬華文学を蘇生させたのは、華人労働運動の高揚とこれと平行して展開した「反黄」運動である。朝鮮戦争によるゴムや錫の需要の拡大で、経済は上向きになっていたが、労働人口の増加も著しく、失業や劣悪な労働条件は依然として深刻であった。生活苦に悩む華人大衆には、マラヤ共産党の社会主義マラヤ建設の呼びかけは魅力あるものであった。欧米帝国主義が

アジアから撤退していくなかで、マラヤのみがイギリスの支配下に留まっていることに対する不満もあった。1949年、中国で共産党が勝利をおさめ、1世紀にわたる帝国主義支配を覆して社会主義中国の建設に向かったことも、マラヤ華人の誇りを刺激し、彼らを反植民地主義・社会主義へ傾斜させる大きな要因となった。

さらに、華人にはイギリス植民地当局に不満をもつ特別な理由があった。それは当局が華語の抹殺をねらっているように見えたことである。戦前、植民地政府は英語を公用語とし、英語学校出身者のみを公務員に採用した。公立学校は英語学校・マレー語学校だけであり、高等教育は英語のみで行われ、私立の英語学校には政府が財政援助を与えていた。戦後、華人社会は華語学校にも援助を与えるよう政府に要求したが、容れられなかった。そればかりか、1948年、シンガポールを除いたマラヤ連邦が成立し、連邦ではマレー語、シンガポールでは英語を共通語として、その普及をはかる政策が確認された。シンガポールの植民地当局はこの政策に従って英語学校を増設し、多くの華人が子弟を英語学校に通わせるようになった。華人社会は華語の将来に不安を抱き、「華語文化抹殺政策」を取る植民地政府を憎んだのである。⁽³²⁾

当然ながら、こうした不満は、英語学校の教師・生徒や華字紙の記者・編集者など、華語文化と日常的にかかわる人々の間にとくに強かった。⁽³³⁾ 彼らは反植民地主義を叫ぶ労働運動を積極的に支援する一方、反英文化運動を展開した。非常事態下の法令によって政治運動は禁止されていたので、反英運動は文化運動の形で行うしかなかったからである。彼らは退廃的な西洋文化を「黄色文化」と呼び、これを排撃してアジア勤労階級の簡素で健康的な文化を擁護する運動、すなわち「反黄」運動を盛り上げたのである。「反黄」運動には、地下のマラヤ共産党と中国の強い影響が見られ、⁽³⁴⁾ マラヤ華人独自の内発的な運動とは言えないかもしれないが、その内容はマラヤの現実に即した独自のものである。だからこそ、教師やジャーナリ

ストなど華語系インテリたちの創作意欲をかきたて、馬華文学に新たな興隆をもたらしたのである。

「反黄」運動期の馬華文学の最大の特徴のひとつは、中国文学との絶縁である。もはや「僑民文学」は問題にされることさえなく、作家たちは現地アイデンティティを当然のこととし、「祖国」マラヤへの愛情を高らかに歌い上げている。⁽³⁵⁾ これは、この時期のもうひとつの特徴である新人作家の活躍と密接に関連している。新来の中国人作家は一人もいないし、わずか15年まえの抗戦文学期に活躍した作家でさえ例外的にしか登場しない。この時期の馬華文学の隆盛は、マラヤで生まれ育った若い華人作家・読者によってもたらされ、支えられたのである。中国の土を踏んだことのない彼らの作品の題材は、マラヤ社会とそこに生活する人々でしかありえない。彼らが好んで描いたのは、彼らに身近な華語学校の教師・生徒の苦悩、華人社会の因習、華人勤労大衆の苦しい生活や勇敢な闘いなどであった。⁽³⁶⁾

この時期に頭角を現した若い作家たち——詩人の杜紅・鍾祺、小説家の謝克・麦青、随筆家の苗芒・陳凡等——は、すぐさま大作を著したわけではないが、清新の気にあふれ、技巧的にもすぐれ、馬華文学がついに土着の作家のみに依存しうる段階に達したことを示している。⁽³⁷⁾ 独立後のマレーシア・シンガポールの華文学を担っていくのは、「反黄」運動期の新人作家たちである。

しかし、この馬華文学の再生期はわずか3年で終わる。1955年、労働運動・「反黄」運動の中心地シンガポールに部分的な自治が与えられ、初めての選挙によって現地人を首班とする政府が誕生した。新政府は、華語に事実上の公用語の地位を認め、英語学校の華人生徒に華語を必修とすること、華語学校にも援助をあたえることを約束した。⁽³⁸⁾ これによって反植民地主義の目標を失った労働運動・「反黄」運動は退潮に向かい、それとともに、その文学も衰退していくのである。

9. 1960年代以降の華文学

歴史的にみれば、「反黄」運動期は馬華文学の有終の美を飾るものであった。1957年、マラヤ連邦は独立し、政治権力はマレー人の手に移った。一方シンガポールは、59年に完全自治に移行し、華人を主体とする人民行動党が政権についた。これによって、1948年以来のマラヤとシンガポールの分離は、さらに決定的になった。華文言論活動においては、両者はなお十数年間一体性を保つが、この間に馬華文学が新たな高揚をみることはなかったのである。

馬華文学が、その40数年の歴史を通じて、ついに解決できなかった重要な問題がいくつかある。その第1は、職業作家がいないことである。作家・文学者は、文学では生活できないので、例外なく別の職業をもち、余暇に文学活動を行う「業余」文学者である。職業は教師が最も多く、次いで編集者、記者、学生の順である。このため、第2に、作家としての寿命が短い。創作歴5年以上に及ぶ者はまれである。したがって、第3に、長編が書かれない。作品のほとんどは、詩・短編小説・短編評論・一幕劇で、習作に近いものが多い。まれに現れる中編小説も、その多くは短編を冗長にしたような作品である。

第4の問題は、文学活動の場がきわめて限られていることである。恒常的な活動の場は、ほぼ日刊紙1ページの文芸副刊だけであり、散発的に副刊が2ページに拡大されたり、同人誌が出されたりするにすぎない。単行本の出版もないではないが、その数は少ないし、大部分は副刊に発表した作品を集めた詩集・短編集である。第5の問題は、大衆文学の不在である。抗戦文学期には、大衆を対象として彼らにわかる言葉で書かれた多数の作品が現れたが、これは抗日の大義を説くためのもので、大衆に娯楽として楽しめる作品を提供するものではない。大衆文学の需要がないわけではなく、中国の古典小説や香港・台湾の武俠小説が人気を博している。馬華文

学における大衆文学の不在は、第1、第2の問題に関連するものと思われる。

これらの問題はすべて馬華文学の市場のせまさに起因している。1920年代には識字率そのものが低く、30年代以降は識字率は徐々に改善されたが、華人大衆はまだ出版物を求めるだけの家計の余裕をもたなかった。経済発展の成果がようやく大衆に波及し始め、馬華文学の市場も拡大するのは、60年代に入ってからである。60年代には、出版事情も改善され、⁽³⁹⁾ シンガポールの華語大学、南洋大学を中心に華文文学活動が活発化した。しかし、このころにはすでに、政治の趨勢が馬華文学の存在基盤を揺るがしており、⁽⁴⁰⁾ またシンガポールでは華語学校の衰退傾向もはっきり表れていた。

南洋大学は、第一義的には東南アジアの華語学校出身者の進学先を用意するために、1956年に設立された。従来、彼らは中国の大学に進学していたが、中国の共産化にともない、東南アジア諸国との関係が悪化し、中国留学の道が閉ざされたので、自前の華語大学が必要になった。南大は、広く東南アジア華僑・華人の支持を受け、この地域の華語教育の最高学府、華語学校教師の養成機関、そして華語文化の中心としての役割を期待された。したがって、華語・華語文学の研究・教育は、南大の主要な活動のひとつであった。⁽⁴¹⁾

南大が馬華文学の活性化に大きく貢献したことは間違いない。第1に、華語大学の存在そのものが華語の威信を高めた。第2に、南大の研究・教育活動によって馬華文学への関心が高まり、作家・文学者が育った。⁽⁴²⁾ これが60～70年代のシンガポールにおける華文文学活動の活発化の一因である。しかし、南大は華文文学に長期的展望を開くことはできなかった。南大卒業生の社会的評価が英語のシンガポール大学の卒業生に及ばなかったため、優秀な学生を集めることが難しくなったからである。⁽⁴³⁾

1965年以降、マレーシア・シンガポールの華文文学は、それぞれの国民文学の一部として認識されるようになった。両国とも、華人の経済力が上

昇した結果、華文文学の市場が拡大し、出版点数が増加した。70年代以降、政府の文化事業に対する助成が強化され、華文文学もその恩恵に浴している。とくに華人が多数を占めるシンガポールでは、政府が各種族の伝統文化の維持を奨励していることもあって、華文文学の出版が盛んである。⁽⁴⁴⁾

しかし、シンガポールでは、戦後以来の華人の華語学校離れが、60年代以降も続いている。これは基本的に、華語の経済価値が英語より低いためである。とくに、独立後、外資系企業が増え、英語能力のすぐれた人材を求めたので、華語学校出身者は英語学校出身者に比べてますます不利になった。⁽⁴⁵⁾ 華人の誇りや伝統よりも子供たちの将来の方が大事だと考える親が増えるのは自然のなりゆきである。すでに50年代末には、華人の小学校新入生のうち華語学校に入った者は半数を割り、その後も年々減って、70年代末には10%程度になってしまった。⁽⁴⁶⁾

マレーシアでは事情が異なる。70年度の小1から年次を追って英語学校がマレー語学校に切り換えられたため、これを嫌った元の英語学校の華人児童が華語学校に流れて、70年代には年々後者の比率が上昇し、華人児童の約8割を占めた。⁽⁴⁷⁾ しかし、この変動は華文文学を再生させるような性質ものではない。というのは、第1に、華語学校は小学校に限られ、習得できる華語のレベルは文学の拡大・向上を促すレベルには届かないからである。⁽⁴⁸⁾ しかも、第2に、華語学校は教師・施設の両面で困難に直面しており、教育水準が低下する傾向にある。60年代末からシンガポール政府が南洋大学の外国人学生数に厳しい制限を設けたため、華語学校教師の養成機関がなく、教師の華語のレベルが低下している。⁽⁴⁹⁾ マレーシア政府は華語学校を縮小する方針で、新設や施設の改善を認めたがらず、華語学校自体も財政的に施設改善が難しい状況である。⁽⁵⁰⁾ 第3に、80年代には上級学校はすべてマレー語学校に転換するので、華語学校出身者は進学に不利である。⁽⁵¹⁾ したがって、華語学校児童の増加傾向は長くは続かないであろう。事実、80年代に入って、華語学校児童の比率は緩慢な減少傾向に転じてい

る。

華語学校の衰退に加えて、華文文学はテーマの面でも難しい立場に立たされた。非常事態は60年に解除されたが、非常事態下の国内治安法は廃止されず、言論統制は今日も続いているからである。治安に対する脅威として、とくに厳しい取締の対象となっているのは、共産党関係および異種族間の対立のもとになりやすい人種・言語・宗教・文化などのテーマである。華文文学は、元来政治・社会の不条理に対する怒りと華語文化に対する愛着と誇りをばねにして発展してきた。戦中・戦後は共産党とも深くかかわっているし、華語の文学である限り、華人・華語およびその文化は最大関心事である。この二大テーマを奪われた華文文学が苦闘を強いられるのは当然と言わねばならない。

1970年代には、まだ「反黄」運動期の作家・文学者が残っていて、苗秀の『残夜行』⁽⁵²⁾をはじめとして、すぐれた作品が現れている。この時期、彼らは創作のかたわら馬華文学の集大成を急ぎ、この分野でもめざましい業績を残した。苗秀と同世代の方修は、戦前の主な作品を網羅した『馬華新文学体系』全10巻を編集し、苗秀自身も、戦後の作品を集めた『新馬華文学体系』全8巻の編集に加わっている。彼らはまた、馬華文学史や馬華文学論の労作にも取り組み、苗秀は『馬華文学史話』を、方修は『馬華新文学史稿』・『戦後馬華文学史初稿』その他を著わしているし、趙戎は『文芸論文集』・『文芸批評集』⁽⁵³⁾を、方北方は『馬華文芸泛論』⁽⁵⁴⁾をまとめている。戦前・戦中・戦後の激動期を生き抜いた彼らは、馬華文学史の証人として、その証言を残したかったのであろうし、また、華人社会にそうした証言に対する需要が高まっているのである。

10. 将来の展望

1980年、シンガポール政府は南洋大学をシンガポール大学と合併させて英語大学とし、華語大学はわずか25年でその歴史を閉じた。⁽⁵⁵⁾ 86年にはシ

ンガポールから華語小学校が姿を消し、92年には華語中学も消える運命にある。政府は人為的に華語中学を残そうとしているので、数校が残る可能性はあるが、72年以後、小中学校で二言語教育が強化され、若い世代の華人には華語が普及したが、会話中心の教育であり、また中学までしか行われないので、質の高い創作活動を促すレベルには届いていない。⁽⁵⁶⁾

マレーシアでは、今なお多数の華語学校が活動しているが、マレー語化政策は着々と進んでいるし、英語に比べて有用性の低い華語の不利な立場は変わらない。⁽⁵⁷⁾ 華人社会は政府に対して数回にわたり華語大学の設立認可を申請してきたが、いずれも却下されている。⁽⁵⁸⁾ また、最近のカリキュラム改正で、華語学校の英語の授業時間数が減らされたので、華人の華語学校離れが加速することが予想されている。現在でも十分でない華語学校出身者の英語力がさらに低下するとすれば、親たちのなかには子供の将来を考えて、英語の時間数の多いマレー語学校に切り換える者が増えると思われるからである。⁽⁵⁹⁾ シンガポール・マレーシアとも、将来華語系インテリ層が育つことは望めそうもなく、華文学の発展は難しいと思われる。

しかし、短期的には、華文学の表面上の隆盛が続くであろう。成人以上の年齢層では、まだしばらくは華語学校出身者が多数を占め、彼らの生活に余裕ができてからである。自分のルーツや文化に興味をもつ者が増え、彼らの購買力は上昇している。華文出版は空前の活況を呈しており、今後もこれが急速に沈滞するとは思われない。こうした状況のなかで、シンガポールの二言語教育の世代が文学への関心を強めていく可能性もないではない。これは、今後彼らの華語能力がどのくらい高まるかにかかっている。マレーシア・シンガポールの華文学が、将来再び連携プレーに入る可能性はほとんどない。長い歴史的関係は一朝一夕にはなくならないし、地理的關係もあるから、交流は保つであろうが、将来両者の関係が緊密化していくとは考えにくい。65年の完全分離以来、両国は別の道を歩み、すでに1世代が経過した。両国は、政治・経済・社会のあり方も、国際的な

立場も、大きく異なっている。両国の華人社会は異なった環境に適応し、政治・経済ばかりでなく文化的な距離も開いている。⁶⁰⁾ この距離は若い世代の間でさらに開いており、将来この距離が縮まる見通しはない。

注

- (1) 本稿に類似した視点から馬華文学を扱った論文に、太田勇・今富正己「マレーシア・シンガポール華人社会の変貌」太田勇ほか編『東南アジアの地域社会』東洋大学、1987年、15～154ページ、がある。これは、博識で現地の状況にも詳しい著者たちの現地調査・現地体験を踏まえた、まことに優れた労作であり、本稿もこれに負うところが大きい。
- (2) 中華民国（台湾）僑務委員会の統計によれば、1984年の華僑・華人の総数は27,782,543人、そのうち2,500万人余、すなわち約9割がアジア在住者となっている。東南アジアについての数字は示していないが、アジア在住者の9割程度が東南アジア在住者とみて大きな間違いはないであろう。市川信愛『華僑社会経済論序説』九州大学出版会、1987年、9ページ参照。
- (3) 華僑・華人の移住史については、以下の文献を参照されたい。市川、前掲書、第1－2章、李国卿『華僑資本の生成と発展』文真堂、1980年、第1－2章、ウィリアム・スキナー（山本一訳）『東南アジアの華僑社会』東洋書店、1981年、第2－3章。
- (4) 華人社会は、同郷組織（幫）を基礎とし、これに同業組合、同姓団体等大小の華人組織が加わった連合体（通常、中華総商会と称する）によって代表される。これらの組織は華人のほとんどを網羅し、彼らの利害を代表するとともに、生活全般にかかわる相互扶助組織でもある。華人組織・華人社会については、以下の文献を参照されたい。市川、前掲書、第4章、スキナー、前掲書、第4－5、7章、内田直作『東南アジア華僑の社会と経済』千倉書房、1982年。
- (5) 東南アジア華僑・華人社会の学校教育については、市川、前掲書、第3章に詳しい。マラヤについては、Philip Loh Fook Seng, *Seeds of Separatism : Educational Policy in Malaya* (Kuala Lumpur : Oxford University Press, 1975), 第2、5章、シンガ

ポールについては、H.E.Wilson, *Social Engineering in Singapore* (Singapore : Singapore University Press, 1978), 第1—4章が、ともに政府の教育政策に視点から華語教育を扱っている。

- (6) マラヤのイギリス系の学校（公立およびミッション系の私立学校）は、英語でイギリス式の教育を行った。これらの学校（英語学校）は種族を問わず生徒を受け入れたので、華人の生徒も少なくなかった。英語学校出身者は、当時唯一の公用語であった英語ができるため、公立の上級学校に進学してエリートになる道も、待遇のよい公務員やヨーロッパ系企業の職員になる道も開かれていた。彼らは華人社会に生活基盤も帰属感ももたず、華語もできず、生活習慣や心情も西洋化していてイギリス人に近かった。英語学校の数も華語学校に比べてはるかに少なかったため、華人全体からみれば、英語系華人は少数であった。

- (7) 英語学校出身者は社会的にも経済的にも優遇されるため、華語学校出身あるいは学校教育を受けていない親が子女を英語学校に入れるケースが多く、とくに戦後英語学校が無制限に増設されるようになってからこの傾向が強まった。こうしたケースでは、言語・知識・価値観から生活習慣まで西洋の影響を強く受けた子供たちが、中国的な伝統を保持する親との世代対立に悩むことになる。彼らの言語は華語ではなく英語であるから、こうした世代対立をテーマとする文学作品は英語で書かれるのである。マラヤの言語別学校教育の展開については、Loh, 前掲書, Wilson, 前掲書に詳しい。その政治的・社会的結果については、拙稿「シンガポールの言語統合」河野健二編『近代革命とアジア』名古屋大学出版会, 1987年, 164—178ページ参照。

戦前のマラヤには馬華文学に匹敵する英語文学は育っておらず、戦後になってようやく現地の独自性を主張する作家・作品が出てきた。ただし、英語による文学活動は、英語教育が普及したシンガポールには限られている。これについては、拙稿「シンガポールの文学」滝川勉編『新・東南アジア・ハンドブック』564—573ページ参照。

- (8) 太田・今富, 前掲論文, 117—118, 120ページ参照。

- (9) 方修『馬華新文学史稿』修訂本(上), シンガポール, 世界書局, 1975年, 9-14ページ。
- (10) 方修は, 当時の小説を次のようにこきおろしている。第1に, 作家がまだ口語に習熟せず, 文体は文語と口語のどっちつかずで, センテンスがやたらに長く, 読者はどこで息をついたらよいかわからない。第2に, 作品は短く, せいぜい1000字から2000字程度で1万字以上のはまれである。内容は事の概略だけで, 細部の克明な描写もなければ, 性格描写も心理描写も雰囲気描写もない。第3に, 概括能力がなく, テーマがはっきりせず, 作者が何を言いたいのかわからない。これは致命的な欠陥である。第4に, 考え方が平凡で, 取り上げた問題に向かう姿勢が真剣でない。このため旧社会を攻撃しても, 文章に破壊力がない。第5に, 態度が不真面目で, 昔の文人のようなひまつぶしの趣味主義に陥っている。これは当時流行した「滑稽短編」や「点将小説」に典型的に表れている。方修「萌芽期小説的一般欠点」『馬華新文学体系』第3巻, シンガポール, 世界書局, 1970年, 20-24ページ。小説よりも詩の方が比較的すぐれた作品があった。同書, 第6巻, 1971年, 1-6, 3-26ページ。
- (11) 方修『馬華新文学簡史』クアラルンプル, 馬來西亞華校董事連合会総会, 1986年, 44ページ, 苗秀『馬華文学史話』シンガポール, 青年書局, 1968年, 第9-13章参照。
- (12) 方修『馬華新文学簡史』第3-6章, 苗秀, 前掲書, 9-23章参照。
- (13) この時期の馬華文学のテーマの多様性については, 方修『馬華新文学簡史』第4-6章, 作家・作品については, 同『馬華新文学史稿』, 第5章, 張金燕, L S女士については, 苗秀, 前掲書, 15-16章に詳しい。
- (14) 『馬華新文学体系』第5巻, 72-83ページ。
- (15) 方修『馬華新文学簡史』81-82ページおよび第7章参照。
- (16) 苗秀, 前掲書, 第27-28章, 方修『馬華新文学史稿』修訂本(下), シンガポール, 世界書局, 1976年, 第9章。
- (17) 満洲事変(1931年)以来の日本の中国侵略に対する危機感が, 馬華文学に活力を与

えた。当初は、世界恐慌の最中で華人の反日運動も盛り上がりならず、またイギリス当局が日本との関係悪化を恐れて反日運動を取り締まったので、反日の文学も抑えられた。しかし、35年以後、日本が華北支配に乗り出し、華人の危機感が高まる一方、イギリスも反日に転じた。35～37年の「反侵略文学」については、苗秀、前掲書、第35章参照。また、36年には戦前の馬華文学唯一の長編小説、林参天の『濃煙』が上海の有名作家の編集する文学叢書のひとつとして同地で出版され、マラヤ文壇の話題になった。同書、第34章参照。

- (18) 方修『馬華新文学史稿』（下）、第10－11章。
- (19) 苗秀、前掲書、358－363ページ。この時期のマラヤ華人の抗日救国運動については、Akashi Yoji, *The Nanyang Chinese Natinal Salvation Movement, 1937－1941* (Kansas City : University of Kansas, 1970) ; 曾瑞炎『華僑与抗日戦争』成都、四川大学出版社、1988年参照。
- (20) 方修『馬華新文学史稿』（下）、第12章、苗秀、前掲書、370－374ページ。
- (21) 同書、363－364ページ、方修『馬華新文学史稿』（下）、372－374ページ。
- (22) 同書、第10－11章。
- (23) 『馬華新文学体系』第4巻、372－473ページ。
- (24) 方修『馬華新文学史稿』（下）、229－233ページ。
- (25) 方修『戦後馬華文学史初稿』クアラルンプル、馬來西亞華校董事連合会総会、1987年、第1－2章。
- (26) 苗秀はこの論争を「馬華文芸の独立・発展のために『僑民文芸』を清算する大規模な論争で、馬華文学運動の時代を画する意義をもち、馬華文芸史上大書特筆すべき事件である」として、その重要性を強調している。苗秀編『新馬華文文学体系』第1巻、シンガポール、教育出版社、1973年、12ページ。苗秀は「独自性」肯定派と否定派に分けてそれぞれの論点を整理・解説し(12－20ページ)、また論争の主要論文10編を選んで同書に収録している。(201－273ページ)。論争の背景と経過については、方修『戦後馬華文学史初稿』第3－5章に詳しい。
- (27) 上記2書によってまとめた。

- (28) 当時、中国本土は内戦のさなかにあり、作家の関心は内戦のゆくえと中国の将来に集中していたので、中国在住の作家は介入していないが、当時マラヤにいた中国民主同盟（中国の知識人政党）系の胡愈之（沙平）・李玄が最も活発に論陣を張り、香港にいた郭沫若・夏衍がこれに加わった。マラヤ在来のもっとも主要作家で「独自性」否定派に属したのは金丁・洪糸糸のみである。
- (29) マラヤ共産党の抗日ゲリラ戦と戦後については、Cheah Boon Kheng, *Red Star Over Malaya* (Singapore: Singapore University Press, 1983) に詳しい。当時の華人青年の期待は、当時の文学作品とくに詩に明確に表れている。方修『戦後馬華文学史初稿』第1章参照。
- (30) マラヤの独立交渉の経緯については、R.A. Wistedt, *A History of Malaya* (Kuala Lumpur: Merican & Sons, 1982), Chapter15参照。
- (31) 非常事態については、同書、Chapter14参照。
- (32) こうした華人社会の動向は、シンガポールに集中的に表れている。一般的な状況については、Yeo Kim Wah, *Political Development in Singapore, 1945-1955* (Singapore: Singapore University Press, 1973) 参照。言語問題・教育問題については、同書、第4-5章、H.E. Wilson, 前掲書、第4-5章、拙稿「シンガポールの言語統合」164-174ページ参照。
- (33) 華語中学（6年制、日本の中学・高校に相当）の生徒・教師が急進化し、マラヤ共産党の公然活動の拠点になったのは、このためである。営利事業である新聞は停刊処分を恐れ、急進化には限界があった。
- (34) 華人政党であるマラヤ共産党は、創立以来中国共産党と密接な関係にあり、1949年以後は後者の指導下にあった。当時の中国は、共産党の新政権のもとに国家統一を成し遂げ、帝国主義支配を脱して、新興の意気あがり、民族の誇りが高まっていたところに、朝鮮戦争でアメリカと戦うことになったため、反西欧・排他主義の風潮が強くなっていた。「黄色文化」の名称も、西欧的なものに対する排撃も、中国からの直輸入である。
- (35) 方修『戦後馬華文学史初稿』第8-10章、方修編『馬華新文学体系』戦後2、シン

ガボール, 世界書局, 1979年, 243ページ以下, 同書, 戦後7, 1981年, 325ページ以下, 陳雪風『十五年来的馬華詩歌』シンガポール, 南大創作社, 1962年, 24-30ページ参照。

- (36) 同上参照。
- (37) 個々の作家・作品については, 方修『戦後馬華文学史初稿』第8-10章が手際よくまとめている。
- (38) この間の事情については, 拙稿「シンガポールの言語統合」174-177ページ参照。
- (39) 楊松年『新馬華文文学論集』シンガポール, 南洋商報, 1982年, 第2-3章に, 1945年以後のシンガポールにおける華文文学の出版状況について詳細なデータがあるが, それによれば, 1945年-59年の15年間の出版点数281に対して, 60年代は331, 70年代は462となっている。
- (40) 1964-65年には, シンガポールのマレーシア加入をめぐるマレー人と華人の対立が先鋭化し, シンガポールで2度にわたってマレー人の暴動が起こった。こうした種族対立がシンガポールを分離独立に追い込んだ。68-69年には, 中国の文化大革命の影響を受けたシンガポールの華語系学生が騒動を起こして弾圧され, 69年には, マレーシアでマレー人の反華人暴動が起こり, その結果, マレー人の政治的優位・経済的優遇政策が強化された。これらの事件は, いずれも華人社会に不利な結果をもたらし, 馬華文学の立場を難しくした。
- (41) 南洋大学設立の経緯については, 太田・今富, 前掲論文, 39-41ページ参照。
- (42) 南大は馬華文学研究・教育に力をいれた。たとえば, 苗秀を中文学科助教授に招き, 方修の戦後馬華文学史の研究・出版を援助している。『戦後馬華文学史初稿』はその成果である。同書, 初版序および再版序参照。
- (43) 南大の苦難と衰亡については, 太田・今富, 前掲論文, 41-45ページ参照。
- (44) 上記注39参照。
- (45) シンガポールにおける華語学校出身者と英語学校出身者の所得格差については, 石川賢作「シンガポール — 華人国家の生存と二言語教育」アジア・エートス研究会編『アジアの社会変動と教育』第一法規, 1986年, 93-94ページ, 拙稿「シンガポー

ルの言語統合」168-169および181ページ参照。

- (46) 拙稿「シンガポールの言語統合」171-180ページ参照。
- (47) 太田・今富、前掲論文、30-34ページ、Kua Kia Soong, *The Chinese Schools of Malaysia* (Kuala Lumpur: United Chinese School Committees Association of Malaysia, 1985), 131-132ページ。
- (48) 政府の財政援助を受けない私立学校では、華語による中等教育が許されているが、こうした学校は公式の学校とは見なされず、卒業資格も認められない。太田・今富、前掲論文、31ページ参照。現在、こうした私立の華語中学は60校存在する。Kua, 前掲書、208-211ページのリスト参照。
- (49) シンガポール政府は、初め南洋大学のマレーシア人学生を学生総数の15%に制限し、1974年、授業用語を1975年度の新入生から順次英語に切り換える決定と同時にマレーシアからの学生受け入れを停止した。太田・今富、前掲論文、42および50ページ。教師養成の困難については、Kua, 前掲書、133-134ページ。
- (50) 同書、130ページ。
- (51) 上級学校における教育面での不利だけでなく、進学試験での不利も増大する。70年代からすでに中学・高校への進学試験はマレー語になっていたが、80年代には大学への進学試験もマレー語になった。
- (52) 苗秀の人と作品については、趙戎がその「苗秀論」で称賛している。趙戎『論馬華作家与作品』シンガポール、青年書局、1967年、1-20ページ。『残夜行』は、福永平和・陳俊勲によって邦訳されている。『残夜行』めこん、1985年。また、同じ訳者たちによってシンガポールの華文作家16人の1945-65年の短編小説17編が邦訳されている。陳徳俊編『シンガポール華文小説選』(上)、井村文化事業社、1983年。
- (53) 『趙戎文芸論文集』シンガポール、教育出版社、1970年、『趙戎文芸批評集』シンガポール、教育出版社、1976年。
- (54) 方北方『馬華文芸泛論』スパン(セランゴール州)、馬來西亞写作者協会、1981年。
- (55) 南洋大学の廃止は、当時シンガポール大学で教鞭を取っていた筆者にとっては、身近な事件であった。この体験は、拙著『シンガポールの奇跡』中公新書、1984年、

156-161ページに記した。南洋大学の消滅前後の事情については、太田・今富、前掲論文、45-47ページに詳しい。

- (56) シンガポール政府は、二言語教育のめざす華語の到達レベルを明確に示したことはないが、カリキュラムの内容・政府文書・要人の発言などから推して、新聞が読める程度であると思われる。拙稿「シンガポールの言語統合」183-188ページ参照。
- (57) 最近、シンガポールでは中国とのビジネスが急増して、華語の有用性が高まっている。マレーシアでも中国との経済関係は発展しているが、政府が中国を脅威と見なし、国内の華人の中国との交流を厳しく規制しているので、この面での華語の有用性は限られている。このため、マレーシアでは、華語は華人社会内部の異なった方言グループ間のビジネスその他の交流に役立つにすぎない。マレー語は、非華人とのコミュニケーション、進学、政府とのかかわりで有用性が高いように見えるが、華人の進学や公務員採用は極度に抑えられているので、彼らにとっては余り役に立たず、それよりも国際ビジネスや海外留学に必要な英語が重要視されている。太田・今富、前掲論文、31-34ページ参照。
- (58) この華語大学はムルデカ(独立)大学と呼ばれ、60年代後半から設立運動が始まり、何回かの挫折を経て現在では下火になっているが、華人社会はまだ希望を捨てていない。太田・今富、前掲論文、50-54ページ、Kua、前掲書、第9章参照。
- (59) 英語学校出身の親たちは、子供を英語学校に入れたかったが、これがマレー語学校に切り換えられたため、心ならずも華語学校に入れたいきさつがある。こうした親たちの関心は華語よりも英語にあるので、華語学校の英語の水準がマレー語学校に劣ることになれば、後者への転換が予想される。華人にとって英語能力はきわめて重要である(上記注57参照)ため、英語教育を受けていない親も、華語学校校離れを起こすかもしれない。その場合、元の英語学校が元来エリート校で、マレー語に変わっても、設備・教師のレベルは華語学校より高いと信じられていることが、推進要因になるであろう。太田・今富、前掲論文、34ページ参照。
- (60) マレーシアにおいては、華人は少数民族であり、政治権力を握る多数種族マレー人が推進するマレー化政策・マレー人優遇政策に適應せざるをえない。その一方で、

マレー化に抗して華人アイデンティティを守る必要に迫られ、華語や華人の伝統・慣習に固執する。逆に、シンガポール華人は、多数種族で権力を握っており、差別されることもないので、華語を失っても他種族の文化に吸収され、アイデンティティを失う危機感がないから、比較的容易に華語や華人の伝統から離れる。また、マレーシアが農村を含み、相対的に経済発展が遅れているのに対して、シンガポールは都市国家で、外に向かって開放的であり、経済的には先進国のレベルに達しているため、後者の方がはるかに生活水準が高く、所得の平準化が進み、ライフ・スタイルが西欧化している。こうした政治的・社会的環境の違いが、両国の華人の文化的差異を広げている。

(付記) 本稿は、中部大学国際地域研究所の共同研究プロジェクト「世界システムとアジア」(1986-88年度)の成果の一部であるが、部分的に文部省科学研究費重点領域研究「東アジア比較研究」(1987年-現在)の中間報告の意味ももっている。本稿の基礎となった調査・研究のための資料の収集・整理と研究交流には、上記研究費および中部大学海外学術調査旅費の助成を受けた。ここに記して深謝する。